

(第3種郵便物認可)

2021年(令和3年)9月15日(水曜日)

滋賀

愛

栗丘

福井

# 大津の子ども食堂助成

## 光と愛の事業団「のぞみ会」勉強も支援

援助を必要とする子どもたちの育成に取り組む団体を支援するため、読売光と愛の事業団が実施している「子ども育成支援事業」の助成団体に、県内からひとり親家庭向けの子ども食堂などに取り組む社会福祉法人「県母子福祉のぞみ会」(大津市)が選ばれた。

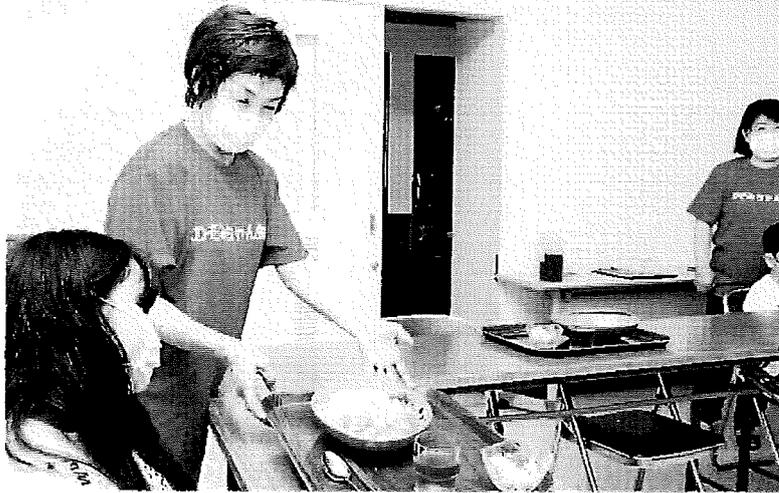
のぞみ会は戦後間もなく寡婦支援団体として発足。その日の暮らしにも困窮する母親同士で支え合い、提供。午前中にはボランティア

イアの大学生3、4人に勉強を教えてもらうのが恒例だ。

夏休み中の8月21日には、小学生5人ほどが宿題を持ち寄り、昼食にはカレーライスをおいしそうにはおぼった。草津市の小学3年の女兒(9)は「ご飯が毎回おいしいし、友達もできた」と笑顔を見せた。

子どもたちが楽しみにしているこの取り組みも、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、今年は休止を余儀なくされる時期が続いた。「こんなときだからこそ、子どもたちをちゃんと支えたい」。中島みどり会長(74)らは、代替策として弁当の配食を企画。元々の開催予定日に、子どもだけでなく親の分も含めて毎回70〜100食ほどを作り、手渡してきた。

中島会長は今回の助成金20万円を活用し、食堂のメニューにデザートを付けたり、オープンを購入してお菓子作りを体験してもらったりすることを計画 중이다。「単にご飯を提供するだけでなく、子どもがより楽しめる場所にし、大学生や地域の人のつながりも増やしてあげたい」と話している。



子どもたちに食事を提供する中島会長(左から2人目)ら(大津市で)

(第3種郵便物認可)

2021年10月7日

「わかくさりビング」で談笑するスタッフら（京都市で）



### 光と愛子ども育成支援事業

## 「京都わかくさねっと」助成

### 貧困や虐待少女に居場所

子どもの育成に取り組み、団体を助成する「読売光と愛の事業団」の子ども育成支援事業に、府内からは、貧困や虐待などで生きづらさを抱える少女の居場所づくりに取り組み一般社団法人「京都わかくさねっと」（京都市）が選ばれた。

同法人は府更生保護女性連盟のメンバーの活動が基となり、2018年に法人化。宿泊施設と連携し、少女が昼寝できる場所をつくったり、食事を無料で提供したりして、信頼できる人間関係を築いている。

10月には、京都市内にある一軒家を借りて新たな居場所となる「わかくさりビング」を開設。今後、ヨガや和菓子作りなどのワークショップも計画し、地域との交流を深める。

支援事業の助成金50万円は、頼ってくる少女らへの食事代や交通費に役立てる。北川美里事務局長は「地域の中で、女の子たちが安心して本音を話せる場所にしたい」と意気込んでいる。

# 少女に居場所 安心育む

## きょうりゅう 人十色

学校や家庭で生きづらさを抱える少女たちを支援する「わかくさカフェ」を、昨年7月、左京区の宿泊施設「HOSTEL NINIROOM（ニニルーム）」と協力して始めた。一般社団法人「京都わかくさねっと」の活動の一環で、毎週火曜の午後3時〜6時、いじめや虐待、貧困など様々な事情を抱える少女らに、無料で食事や生活用品を提供している。

### 京都わかくさねっと事務局長 北川美里さん 56



ニニルームで談笑する北川さん（左から2人目）。「新型コロナウイルスの影響で大学に行けず、一人暮らしで孤独を感じた学生が来ることもある」（左京区で）

ことを最優先にしている。真正面から向き合い、思いに耳を傾けてあげることが大切です」と話す。

◇ 広告代理店に就職し、仕事に追われる日々だった。転職が訪れたのは、結婚を機に退職し、子育てに励んでいた38

歳の頃だった。知人から、非行少年らの更生を指導する保護観察所の事務作業を担う内勤保護司を務めることを提案され、「人のためになるなら」と引き受けた。

た。少年院からの仮退院者や、保護観察処分となった少年らと定期的な面談し、生活の立て直しや就労相談に乗ってきた。

活動の中で、印象に残っている少女がいる。薬物に手を染め保護観察中だったその少女は、職も帰る家もなかった。一緒に仕事を探していたさなか、交際相手との関わりをきっかけに再犯してしまった。

その後、少女から届いた手紙には「こんなにも私のことを考えてくれていたのに、ごめんさい」とつづられていた。「周囲にこんなに大人がいないのに、本音を言える人がいない少女は、どれだけ孤独で、つらい思いをしてきたのだろう。社会の中にそういう場所を作ってあげることができたら」。この思いが、少女たちの居場所作りに励む活動の原点になっているという。

その少女とは連絡が途絶えてしまい、助けられなかったとの後悔が今もある。「私が活動を続けることで『いつ会いに来てもいいんだよ』との思いが届いてほしい」と話す。

◇ その後、所属していた府更

生保護女性連盟のメンバーで「京都わかくさねっと」を設立し、2018年に法人化した。当初は非行少女の支援を目的としていたが、「誰もが本音を語れる場をつくり、少女たちの生きづらさを解消しないと犯罪も減らない」と、更生保護にとどまらず、不登校など困難を抱える少女を誰でも受け入れることにした。

「家族から虐待を受けている少女は、自分のやりたいことを抑え、我慢する傾向がある。そうした少女たちの心をほぐして、夢や可能性を広げてあげたい」と力を込める。

10月には、中京区の一軒家を借りて、新たな活動拠点となる「ロッカクリビング」をオープンさせる。「わかくさカフェ」と同様に少女に食事を提供するほか、医師や心理士との個別相談も受け付ける予定だ。

若い女性が主体的に運営し、若者が気軽に立ち寄れる環境を作ろうと考えている。

「支援する側、される側の境界も取っ払って、悩みや思いを共有できる場所になりたい」

(松崎暹)

きたがわ・みさと 1964年、神戸市生まれ。京都市在住。左京区の保護司会に所属。京都わかくさねっとは、3月の第14回国連犯罪防止刑事司法会議（京都コングレス）にも参加した。京都わかくさねっとの活動に関する問い合わせは、メール（wakakusanet@gmail.com）。

その後、所属していた府更

(松崎暹)

# 河内長野の団体に助成

## 無料食堂で居場所作り

子どもの健全育成に取り組み団体を支援する読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」に、府内からは河内長野市小田地区の住民グループ「子ども食堂くチャイルドシート」が選ばれた。



子どもに弁当を配るメンバーら(河内長野市で、「子ども食堂～チャイルドシート～」提供)

代表の西村佐江子さん(60)は市内の小学校で主任児童委員を務めていた時、一人親や共働きの家庭の児童らが休日には十分な食事を与えられていなかったり、一人で過ごしたりするケースがあることを知った。

「何とかしないと」との思いを募らせ、「放課後の学童保育がない日曜日に、子育て世代の負担を減らし、子どもが安心できる居場所をつくらう」と住民に呼びかけ、2018年9月、地区内の集会所で子ども食堂の運営を始めた。

毎月第4日曜日、地域の女性らがボランティアで集まり、集会所で調理する。地元農家から贈られた米を使ってカレーライスを作る。子どもは無料、大人は300円で提供。メンバーは調理だけでなく、

勉強をみたり遊び相手になったりし、子どもたちも「食堂がある日は、ママがゆっくりできるのでうれしい」「友達と会えるから楽しい」などと喜んでいっている。

昨年7月からは、新型コロナウイルス感染症防止のため市販弁当の配布に切り替え、地区内の公園事務所などで子どもへの無料提供を続けている。毎回30～50人が利用するが、緊急事態宣言などのため、今年6月からは休止している。

西村さんらのメンバーは現在40～80歳代の約30人。地元の医療機関や農家が食材の提供などで活動を支えている。

今回事業団からの助成金(18万円)については、弁当代のほか、手指の消毒液や使い捨て手袋など感染防止用品の購入にも充てている。クリスマスにはプレゼントも配る予定だ。西村さんは「子どもたちの『早くまたカレーを食べたい』との声を励みにしながら、食堂再開までは頑張って弁当を配りたい」と話す。

# 困窮の若者支援に助成

光と愛の事業団 神戸のNPO



支援品の食料を段ボールに詰め込む事務局長の野口さん（右、神戸市垂水区）

子どもの育成に取り組む団体を支援する、読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」に、里親や里子らをサポートするNPO法人「Giving Tree」（神戸市垂水区）が選ばれた。事務局長の野口美子さん（57）は「支援を通じて人とのつながりを感じてほしい」と話す。

法人は2017年に設立。里親家庭や18歳を機に自立した若者らの支援を続けていく。

児童養護施設の職員だった野口さんは、設立メンバーの一人。家庭の事情で親

と離れて暮らす子どもたちは、親戚に頼ることも難しく、経済的、精神的に不安定な生活を余儀なくされている。そうした現状を目の当たりにし、「自立を目指す若者の支えになりたい」と、活動を始めた。

これまでに、就職活動に必要なスーツの購入費や私立高校の入学準備金のほか、フードバンク関西と協力して食料を提供。里親らへの研修も開いてきた。

今回、50万円の助成金が送られるのは、コロナ禍で生活がままならなくなった若者や家庭のための「食・

生活支援事業」。食料や生活用品、トイレットペーパーなどの生活必需品を送り届け、同時に緊急時の相談窓口として地域のつながりを維持する狙いがある。

野口さんは「コロナ禍で収入の見通しがたらず、孤立してしまった若者は少なくない。収束後も地域でつながり、相談できる仕組み作りにつなげることができれば」と話している。

天気	神戸	姫路	洲本	三田	豊岡	丹波
午前	☁	☁	☁	☁	☁	☁
午後	☁	☁	☁	☁	☁	☁
夜	☁	☁	☁	☁	☁	☁
降水確率	20	20	20	20	30	20
最高	30	30	30	29	31	30
最低	24	21	21	20	21	21
1 (金)	☁ 29 ☁ 40	☁ 27 ☁ 40	☁ 27 ☁ 40	☁ 25 ☁ 40	☁ 24 ☁ 40	☁ 24 ☁ 40
2 (土)	☁ 29 ☁ 10	☁ 28 ☁ 10	☁ 27 ☁ 10	☁ 25 ☁ 10	☁ 25 ☁ 10	☁ 26 ☁ 10

## あすのこ

10月1日(金)  
旧暦 8月25日

日出 5:54  
日入 17:44  
月出 —  
月入 14:52

北部 南の風のち北の風曇時  
(あす)曇時々雨波2く

南部 北東の風のちやや強く  
(あす)曇波1.5m

### 不登校の子ども

### 支援団体に助成

読売光と愛の事業団

「子ども育成支援事業」に、



不登校の子どもを支援する  
伊沢さん（高松市で）

不登校の子どもを支援する一般社団法人「もも」（高松市）が選ばれた。設立メンバーの伊沢絵理子さん（31）は「学校や家に居づらい子どもが心地よく過ごせる場所になりたい」と語る。ももは2018年に任意団体として設立され、20年に法人化。高松市内の古民家で、不登校の小中高校生らを無料で受け入れて食事を提供したり、有料で塾を開き、一人一人の学習速度に合わせて指導したりしている。

今回の助成金は50万円。自傷行為の恐れがある子どもらがショートステイで生きるよう寝具などを購入するほか、臨床心理士による訪

問カウンセリングの委託費などに充てる。

伊沢さん自身も学校に行きづらい時期があったとい

い、「自分がしてもらったことを返したい。応援する大人がいるんだって子どもたちに知ってもらえたら」と話す。

## 臼杵の団体に助成金



光と愛の事業団子ども育成支援事業

山本校長（左）に贈呈品を手渡す村上代表

臼杵市の野津町わくわくの会（村上陸美代表）が読売光と愛の事業団が取り組む「子ども育成支援事業」の助成団体に選ばれた。生理用品に困っている小中学生を支援しており、助成金は購入費や郵送料に充てる。

会は2002年に設立され、40～80歳代の住民ら約20人が参加している。コロナ禍で表面化した「生理の貧困」に目を向け、苦勞している子どもたちを助け、行政に支援の必要性を伝える。

る。

野津小学校（山本英幸校長、197人）では23日に生理用ナプキンの贈呈式があった。村上代表は「子どもたちが必要なだけ使えるように応援したい」とあいさつ。山本校長は「子どもたちが安心できるように活用したい」とお礼を述べた。

会は、町内の小中学校の児童、生徒に希望を募り、ナプキンやショーツ、専用洗剤のセットを送ることにしている。

# 奄美の団体に助成金

光と愛の事業団 子ども育成支援

読売光と愛の事業団の「子ども育成支援事業」の助成団体に、県内からは奄美市名瀬佐大熊町の「居場所づくり支援事業Ummuuむ」(原田さおり代表理事)が選ばれた。食材や文房具、マスク購入などに充てる計画だ。

Ummは2013年7月発足。「生まれる」から「人生への新しい一歩を踏み出させる」と思いを込めて命名したという。主婦や保育士など約10人のボランティアがおり、地域の子どもたちや若者への弁当作りや学習支援などを無償で行っている。

弁当作りは、原田代表理事(50)が経営する小売店「楽笑」の仕事が一段落



原田さおり  
代表理事

する午後から。多い日で1日約100食になる。子どもたちにはゆっくり向き合える夕方、「頑張っている」「調子はどう」と声をかけながら手渡す。店舗3階の自宅では、学習支援にも力を入れている。

スクールソーシャルワーカーとして多くの親子に寄り添った経験がある原田代表理事は「新型コロナウイルスの影響で、生活が厳しくなった家庭が増えている。今回助成を受けたことで、食材や教材、衣服、寝具などを提供することができる。困難を抱える子どもたちの居場所づくりに取り組んでいきたい」と話している。

## コロナ5人感染

県内では25日、新たに5